

---

# 陰影 0

Ryuna

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

陰影0

### 【Nコード】

N1947L

### 【作者名】

Ryuna

### 【あらすじ】

この世界には、『影』がありました。この世界には、『陰』もありました。しかし、この世界には、『光』がありませんでした。それが、当たり前だったのです。この世界では、そうではなくてはいけなかったのです。

そうでないものは、皆、皆　。

狂った世界を変えようと抗う、命達の物語。

## プロローグ・不明

プロローグ            不明

夕暮れ、雑踏する街角。橙色の光に照らされて、各々は自らの行くべき場所へと歩いていく。それがどこなのかなんて、誰にも分からない。もしかしたら、本人にも分かっていないかもしれないのだから。

彼らの足元には、それぞれ黒い物が蠢いている。これを、この世界では『影』と呼ぶ。『影』は誰にでも存在する物。その人間の存在を示す物ともいえる。但し、意思は持たない。主である人間のシルエットを映す、いわばひとつの鏡影のような物。

また、主である人間が死んだ途端、『影』はパタリと姿を消す。つまりは、『影』とは人間の存在を示す印のような物でもあった。

溢れかえる人々の中に、少年がひとり。

年齢は十代半ばといったところだろうか。色素が薄く、特徴的な撥ね方をした髪。その下の顔立ちは幼いようで、それでいて端整で、僅かながらも精悍さを醸し出している。服装は、至って地味な色をした、チャック付きのトレーナー。左胸にはスパーードとダイヤらしきイラストが刻まれている。そして、それと同色のズボン。だが、そのデザインは極めて奇抜。少年の左脚が完全に隠れているのに対し、右脚は膝下から剥き出しになっている。また、右脚の生地には、赤色の十字架のような模様が描かれていた。

少年の首には赤色をしたマフラーが巻かれており、それは多くの人々が集う中で、とても良く目立っていた。

少年の表情は、暗かった。いつから暗いのか、それは分からない。何故そんな顔をしているのか。理由は、あった。必ず共通するはずの部分が、少年には存在していなかった。皆にあって、自分には無い。つまりは、仲間外れということだった。

少年には、『影』が無かった。

足元をうねうねと不気味に徘徊しているはずの黒い物。それが、少年には無い。それはこの世界の異常であって、異端だった。そんなことは、あつてはいけないことなのだ。

少年は、それが良く分かっていて。だからといって、どうしようとも思わなかった。

少年は『影』を持たなかった。つまりは、『陰』を持つことも許されなかったのだ。

この世界には、『影』がある。『影』というのは実体を持った意思の無い、目で確認出来る物だ。対して、『陰』というのは実体を持たない、目では確認出来ない物。すなわち、精神的存在である。簡単に説明すると、『陰』というのは負の感情である。また、その中でも特に人間を揺さぶり易い物、怒り。それを起点として発生する、苛立ち・恨み・嫉妬・憎悪……。それは誰しもが必ず一度は抱いたことのある感情であり、また、少なからず必要とされている感情なのだろう。

これらふたつの『カゲ』は、同時に存在していなければいけない。つまりは、ふたつで、ひとつ。

以上のことから、少年には『影』が無い時点で『陰』も無いということになる。

それが（この世界では）幸せで無いということは、きっと少年自身が誰よりも分かっているのだろう。ひよっとしたら、（この世界の）神よりも良く分かっているかもしれない。

少年は煉瓦造りの壁に寄り掛かって、せわしく動く人々を傍観していた。時折少年に対して、人々から異物を見るような視線が向けられた。が、少年はそれを気にしようとはしなかった。もう、慣れちゃまっている様子だった。

時は過ぎていく。人間達を照らしていた太陽も、地平線へと隠れ

ていく。辺りを包む『影』が姿を現し始める。対して、人の数は次々に減っていく。だが、少年は変わらず壁に寄り掛かっていた。

ふと、少年は空を見た。境界線付近は僅かに赤みがかっていたが、上の方はもう黒が支配していた。いつものように、月は空に張り付いていた。その青白い光が、少年を照らす。『影』は、無かった。そうして、少年は建物の『影』に覆われた。

「君、ひとりなのー？」

闇に支配された不気味な場とは裏腹な、無邪気で可愛らしさが残る声が響く。

地面を見ていた少年は顔を上げる。前方、『影』に支配されていない場所。月の光が届く場所に、ひとつ、ぼつねんと人間が立っていた。

その姿は、まるで『影』のように真っ黒だった。上から下まで、漆黒の衣服が人間を包んでいる。そして、その足元に『影』は無かった。

少年がそれに気付いたのか気付かないのか、それは分からない。

ただ、黒人間を見たまま、

「俺に何か用ですか」

と、力無く言った。

「用って程の物じゃないけどさ」

黒人間は言う。少し幼めの、少年のような、子供っぽい声。黒人間は少年に近づこうとはしなかった。その為、黒人間の詳しい容姿は読みとれなかった。この距離と光の加減では、黒いシルエットとしか認識出来なかったのだった。

続けて、可愛らしい声が響いた。

「君、ここにいと死んじゃうよ？」

すると、酷く現実離れした言葉が滑り出た。あまりにも唐突に、何の前触れも無く。だが、それに少年は驚くこともたじろぐことも、そればかりか反応することすらしなかった。興味が無いのか、それとも関心が無いのか……。

「あー、もう。僕の言うこと聞かないと本当に死んじゃうよ？」

駄々をこねる子供のように、黒人間は地団太を踏む。その幼稚な姿と。発した言葉と。それらは、あまりにも違いすぎた。

突然、辺りが真っ暗になる。月の光が、消えた。雲に隠され、見えなくなってしまった。同時に、黒人間も消えた。いや、隠れたというのが妥当なのだろうか。黒人間の服は、闇と完全に一体化してしまっていた。

「あー、遅かったかあ」

黒人間の声が聞こえた。姿は無い。楽しそうで、悲しそうな声色を立て続けに、唸るような、呻くような……この世の物とは思えない音が響き渡った。これには、さすがの少年も、驚くような反応を示した。

「僕はもう知らないよ。……せいぜい、逃げなかったことを後悔しな！」

ぶつきらぼうに放たれた言葉を最後に、黒人間の声と気配は消失した。

代わりに、先程の音が空間を裂くようにして届く。そのおぞましさと迫力に、不快感を通り越した恐怖を、少年は感じていた。

同時に、僅かな悲しみも。……何故そんな物を感じるのか、少年は分からなかった。理解する前に、その音の主が現れた。

少年を覆うように現われたそれは、真っ白な色をした、くつきりとしたシルエツトのような物体だった。大きさは少年の五倍程度だろうか。頭や腕、脚に胴体、どれがどこにあるのかは全く見当つかないような、そんな身体を持っていた。少年は悲鳴を上げるのを忘れ、しばしその奇妙な物体に釘付けになっていた。そんな余裕が無いことくらい、重々承知しているのに。

物体は瞬時に自らの身体をギザギザに裂けさせ、再び音を発する。また、裂けた部位からは赤い液体が噴き出している。少年が、その音こそが物体の声ということに気付くには、少し時間が掛かった。更に、少年はあることに気付く。その物体から噴き出しているの

は、血だ。

「もしかして……」

恐怖を忘れ、少年は物体に近づく。

「お前、泣いているのか……？」

物体は返事をするように声を上げる。少年が、それに近づいて分かったことはふたつあった。ひとつは、この物体は白いわけではなく、輝いているから白く見えただけなのだということ。そしてふたつ。身体中が裂けてしまっているのは、酷い怪我を負っているような状態だからということだ。

少年が、先程感じた悲しみの正体はこれだったらしい。音に込められた苦痛の感情が、直接少年に伝わってしまったのだろう。

「というより、一体何がどうなって……」

少年はすっかり警戒を解いたのか、更に物体へと接近した。

瞬間、物体の姿が消滅する。

「え？」

少年は、呆然とそこに突っ立ったまま、声を上げる。

途端に、ぞくり、と。自分の背後に、冷たい何かを感じた。振り向こうとしたが、身体が動かない。少年の耳元で、声が聞こえた。若い、男の声だった。

「やっと、見つけた……」

少年には、全く言葉の意味が分からない。問いかけようとして、しかし、それよりも男の声が早かった。

「けど、悪いな……お前の身体、借りるぞ」

少年が再び、『え？』とつぶやくかつぶやかないかの瞬間に、竜巻のような、台風のような、異常なまでの暴風が少年を包みこんだ。しかし、どこかへ吹き飛ばされると言うことはなかった。いつの間にか、台風の目というべき場所にいたからだ。

少年の姿は、風のような光に包まれ、見えなくなった。発生した強風は空の雲さえも吹き飛ばし、再び月が姿を現した。

同時に、あの黒人間も現われた。依然、足元に『影』は無い。黒

人間は、近くにあった公園の、翼の生えた少女のオブジェに腰を落ち着かせていたが、月の姿を確認しつつ、地面に降りた。

「やれやれ……」

黒人間の目線の先には、少年の姿があった。少年は、壁に寄り掛かるように倒れており、その足元には　今まで存在していなかったはずの『影』があった。

「まあ、どうせこうなる運命だったけどね」

黒人間は倒れている少年に近づきしゃがみ込むと、頬を優しく撫でた。少年の身体には傷ひとつ無かったが、顔色は酷く悪かった。

「この世界に抗うなんて、また粹なことをするものだ」

黒人間は、悲しそうに、誰かを嘲笑うかのように言った。

この世界には、『影』と『陰』がありました。『光』は、ありませんでした。

この物語は、歪な、狂った世界に迷い込んだ、本来ここにはあつてはならない『光』達の物語。彼らの、抗いの物語。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1947/>

---

陰影 0

2010年10月9日16時16分発行